# 『賈誼新書』譯註稿（三）　過秦上（3）

工藤　卓司

凡例については、拙稿「『賈誼新書』譯註稿（一）」（『東洋古典學研究』第四九集所載）を參照されたい。

1-7（始皇）〔秦王〕(1)（既没）〔既没〕(2)、餘威震(3)於(4)殊俗。然〔而〕(5)陳涉、甕牖(6)繩樞(7)之子、氓隷(8)之人、而遷徙之徒(9)也。才（不能）〔能不〕(10)及中人(11)、非有仲尼(12)・墨翟之賢(13)、陶朱・猗頓(14)之富(15)、躡足行伍之間(16)、而俛(17)起（阡陌）〔什伯(18)〕之中(19)、率疲弊之卒(20)、將數百之衆、轉(21)而攻秦。斬木爲兵、揭（干）〔竿〕(22)爲旗、天下雲合(23)（嚮）〔響〕(24)應、贏(25)粮(26)而景(27)從。山東豪俊(28)〔遂〕(29)並起、而亡秦族(30)矣。

始皇既に沒するも、餘威は殊俗に震ふ。然り而して陳涉は、甕牖繩樞の子、氓隷の人にして、而して遷徙の徒なり。才は中人にも及ぶ能はず、仲尼・墨翟の賢、陶朱・猗頓の富有るに非ず、足を行伍の間に躡みて、而して什伯の中より俛起し、疲弊の卒を率い、數百の衆を將い、轉じて而して秦を攻む。木を斬りて兵と爲し、竿を揭げて旗と爲すも、天下は雲合して響應し、粮を贏ひて而して景のごとく從ひたり。山東の豪俊は遂に並び起こりて、而して秦の族を亡ぼしぬ。

【口語譯】

始皇帝が歿してしまっても、先祖代々の威勢は風俗を異にする様々な地域をも動かすものであった。ところが陳涉は、甕の口を窗とし縄で戸口をくくりつけたような貧しい家出身で、下賤の人であって、そして流刑の徒であった。材能は中人にも及ぶことはできず、仲尼・墨翟の賢さ、陶朱・猗頓の財が有る譯でも無く、軍隊の中を驅けずり回っていたが、十人長百人長の中から這い上がり、疲弊した兵士數百人を率いて、轉じて秦を攻撃した。木を斬って武器とし、竿を掲げて旗としたものだったが、天下の人々は雲が集まる様にそれに呼應して、糧食を背負って影の様に從った。山東の豪傑も並び起こり、そして、とうとう秦の一族を亡ぼしてしまった。

（1）「秦王」、四部叢刊本はもと「始皇」に作り、『史記』陳涉世家・『漢書』陳勝項籍傳・『文選』・何本・程本・子彙本・兩京遺編本・朱本・『賈長沙集』・四庫全書本・盧本・王謨本・和刻本も同じ。『史記』秦始皇本紀・『羣書治要』・王耕心本は「秦王」に作る。今、過秦下篇に従い、「秦王」に改める。

（2）「既」、四部叢刊本はもと「既」に作り、『史記』秦始皇本紀・陳涉世家・子彙本・兩京遺編本・四庫全書本・和刻本も同じ。しかし、『漢書』陳勝項籍傳・『文選』・『羣書治要』・朱本・盧本・王耕心本は「既」、何本・程本・『賈長沙集』・王謨本は「既」に作る。今、上文に従って「既」に改める。「没」、『漢書』陳勝項籍傳・子彙本・兩京遺編本・朱本・王謨本・和刻本・王耕心本は「没」、盧本は「沒」に作る。『正字通』に「沒は、謁（なま）りて殳に從ふ」とある。今、「没」に改める。

（3）「震」、『史記』秦始皇本紀・陳涉世家・『羣書治要』・何本・程本・子彙本・兩京遺編本・朱本・『賈長沙集』・盧本・王謨本・和刻本は「振」に作る。『禮記』月令「蟄蟲始振」注に「振は、動なり」と有り、『爾雅』釋詁に「震は、動なり」と有れば、「震」「振」通ず。

（4）「於」、『漢書』陳勝項籍傳・『文選』・『藝文類聚』・程本・子彙本・朱本・王謨本・和刻本は「于」に作り、『羣書治要』は無し。

（5）「而」、四部叢刊本はもと無く、盧文弨は「潭本は『而』字無し」と言い、兩京遺編本も同じ。『史記』秦始皇本紀・『羣書治要』は「然而」の二字無し。王耕心は「史記秦始皇本紀には『然而』二字無し。盧本は文のごとく、諸家も同じ。愚按ずるに、二字無きは、謬れること甚だし。今、原文（盧本、以下同じ）に仍る。或ひは『而』字無きも亦た非なり」と言う（『賈子次詁』校詁一）。今、補う。

（6）「甕」、『史記』秦始皇本紀・『羣書治要』は「罋」に作る。王耕心は「史記秦始皇本紀は『罋』に作る。盧本は文のごとく、諸家も同じ。是なり。今、原文に仍る」と言う（『賈子次詁』校詁一）。『集韻』に「罋は、陶器なり、或ひは甕・罋に作る」と有れば、「甕」「罋」同じ。また「牖」、何本・程本・子彙本・兩京遺編本・朱本・王謨本・和刻本は「牖」に作る。李善は「禮記（儒行）に『儒に蓬戸甕牖有り』と曰ふ」と言う（『文選』注）。また、『莊子』讓王と『韓詩外傳』卷一に原憲について述べて「甕牖」と有り、『呂氏春秋』慎大覽、下賢にも「甕牖」と見える。

（7）「繩」、何本は「繩」、子彙本・兩京遺編本・四庫全書本は「繩」に作る。

（8）「氓」、盧文弨は「潭本、『氓』は『甿』に作る」と言い、何孟春も「一に『甿』に作る」と言う（『訂註賈太傅新書』）。『史記』秦始皇本紀・陳涉世家・『漢書』陳勝項籍傳・『文選』・『羣書治要』・兩京遺編本・『賈長沙集』・王耕心本は「甿」に作る。裴駰は「甿は、古の氓字なり」と言う（『史記集解』秦始皇本紀）。王耕心は「盧本、『甿』は『氓』に作る。史・漢・文選は皆な文のごとし（『甿』）。愚按ずるに、『甿』は古文なり。『氓』、周官にては多く『甿』に作る、是なり。今、改正す」と言う（『賈子次詁』校詁一）。しかし、

「氓」は『詩經』はもとより、『孟子』や『淮南子』にも見えている。今、改めず。

（9）「隷」、『史記』秦始皇本紀・陳涉世家・『漢書』陳勝項籍傳は「隸」、『文選』・『羣書治要』・何本・子彙本・兩京遺編本・朱本・『賈長沙集』・四庫全書本・盧本・王謨本は「隸」に作る。『玉篇』に「隷は、隸に同じ」と有る。また、『康熙字典』には「廣韻には俗に『綜』に作るとあり。韻會・正韻に『隷』に作るは、非なり」と有る。

（10）「也」、『史記』秦始皇本紀・『賈長沙集』は無し。王耕心は「史記秦始皇本紀は『也』字無し。盧本は文のごとく、諸家も同じ。愚按ずるに、『也』無きは殊に謬れり。今、原文に仍る」と言う（『賈子次詁』校詁一）。なお、『羣書治要』は「而遷徙之徒也」無し。

（11）「才能不」、四部叢刊本はもと「才不能」に作るが、『史記』秦始皇本紀・『羣書治要』・『賈長沙集』・四庫全書本は「才能不」、陳涉世家・『漢書』陳勝項籍傳・『文選』・何本・程本・子彙本・朱本・盧本・王謨本・和刻本・王耕心本は「材能不」、兩京遺編本は「材能不」に作る。『史記』に「才能不及中人」（李將軍列傳）や「狀貌不及中人」（游俠列傳）と見えることからすれば、「才能不」が正しいか。今、改める。

（12）「中人」、盧文弨は「潭本は『中庸』に作る」と言い、何孟春も「人」について「一に『庸』に作る」と言う（『訂註賈太傅新書』）。『漢書』陳勝項籍傳・『文選』・程本・兩京遺編本・朱本・『賈長沙集』・四庫全書本・王謨本・和刻本・王耕心本は「中庸」に作る。李善は「方言に『庸は、賤稱なり。言ふこころは、中等の庸人に及ばずとなり」と言い（『文選注』）、王耕心は「盧本、『庸』は『人』に作り、史記も同じ。漢書・文選は文のごとし。是なり。義は李善說に見ゆ。今、改正す」と言う（『賈子次詁』校詁一）。しかしながら、『史記』李將軍列傳には、李廣の發言中に「才能は中人に及ばず」と有り、游俠列傳贊に「（郭解は）狀貌は中人に及ばず」と有るから、「中人」のままとする。

（13）「仲尼」、盧文弨は「『仲尼』は、別本には『仲弓』に作る。案ずるに、荀子常に仲尼・子弓を以て竝稱す。子弓は蓋し卽ち馯臂子弓なり。或ひは仲弓は卽ち冉雍なりと云ふ。夫子は其の南面するを許せば、此に稱する所の者は是れならん。『仲尼』に作る者は、或ひは轉じて史記の本に據りて之を改むるのみならん」と言う。何本は「仲弓」、程本・朱本は「仲弓」に作る。何孟春は「弓」について「一に『尼』に作る」と言う（『訂註賈太傅新書』）。王耕心は「盧本・諸家皆な文のごとし。是なり。今、原文に仍る。惟だ別本に『仲弓』に作る或りて、盧氏の意以て是と爲す。蓋し孔墨竝び稱すること屢ば晩周の諸子に見ゆるを知らず、『尼』を改めて『弓』と爲せば、乃ち淺人の妄竄に出づるものにして、決して賈子の原文に非ざるなり」と言う（『賈子次詁』校詁一）。祁玉章も「仲弓は何如なる人なるか、尚ほ確考すべからざれば、賈子豈に肯へて以て墨翟と並稱せんや。盧氏は但だ別本にのみ據りて、當に仲弓に作るべしと以爲ひたるは、疏なり」と言う（『賈子新書校釋』）。『史記』李斯列傳に趙高の言葉として「孔墨之智」と有り、また、前漢武帝期の徐樂の言に「陳涉は千乘の尊・尺土の地無く、身は王公大人名族の后に非ず、

鄉曲の譽も無く、孔・墨・曾子の賢、陶朱・猗頓の富有るに非ざるなり。然れども窮巷より起こりて、棘矜を舊ひ、偏袒大呼して而して天下風に從ふがごとし」と過秦論と同様の問題設定を見ることができる（平津侯主父列傳）。『賈誼新書』中、他には「孔子」という言い方しか見えないが、ここでは「仲尼」が正しいだろう。

（１４）「賢」、『漢書』陳勝項籍傳は「知」に作る。王耕心は「漢書、『賢』は『知』に作る。盧本は文のごとく、諸家も同じ。是なり。今、原文に仍る」と言う（『賈子次詁』校詁一）。「賢」か「知」かは判じ難い。今、原文に據る。

（１５）「猗」、『史記』秦始皇本紀・陳涉世家・『漢書』陳勝項籍傳・盧本・王耕心本は「猗」、『羣書治要』・兩京遺編本は「倚」、朱本は「猗」に作る。何本・程本・子彙本・『賈長沙集』・四庫全書本・王謨本・和刻本は四部叢刊本に同じ。

（１６）『史記』陳涉世家は「富」の下に「也」字有り。王耕心は「史記陳涉世家、『富』の下に『也』字有り。盧本は文のごとく、諸家も同じ。是なり。今、原文に仍る」と言う（『賈子次詁』校詁一）。

（１７）「間」、『史記』秦始皇本紀・陳涉世家・『羣書治要』・盧本・王耕心本は「閒」に作る。

（１８）「而俛起」、盧文弨は「潭本は『而倔起』に作り、始皇本紀と同じ。陳涉世家は『俛仰』に作る」と言い、何孟春は「『俛』、史記は『倔』に作る」と言う（『訂註賈太傅新書』）。『史記』秦始皇本紀・兩京遺編本・『賈長沙集』は「而倔起」、陳涉世家は「俛仰」、『漢書』陳勝項籍傳は「而免起」、『文選』・子彙本・盧本・和刻本は「俛起」、『羣書治要』は「出倔起」、王耕心本は「倔起」に作る。兪樾は「『俛』は當に始皇本紀に從ひて『倔』字に作るべきも、誤りて『俛』に作る。而も陳涉世家は遂に『俛仰』に作りたり」と言う（『諸子平議』、賈子一）。王耕心は「盧本、『倔』は『俛』に作り、文選も同じ。史記秦始皇本紀は『而倔起』に作り、陳涉世家は『俛仰』に作り、漢書は『而免起』に作る。（中略）愚按ずるに、『而』は衍文なれば、今取らず。『倔起』（中略）に作る、皆な是なり。上に『躡足行伍之閒』と云ふは、戍卒と爲りしを謂ふなり。此に『倔起阡陌之中』と云ふは、起つに田閒よりするを謂ふなり。今、參訂して文のごとくす。兪氏、『阡陌』は當に『什伯』に作るべしと謂へるは、蓋し未だ二句の義を考せず、且つ行伍は猶ほ什伯の轉のごとく、上文と繁複するを忘れしならん。『免』は乃ち『俛』字の誤りなり。顔師古（語釋參照）必ず強解を爲すは、尤も謬れり」と言う（『賈子次詁』校詁一）。「而」字の有無及び「俛起」・「倔起」・「俛仰」のいずれかについては判じ難いので、今、改めず。

（１９）「什伯」、四部叢刊本はもと「阡陌」に作り、『漢書』陳勝項籍傳・『文選』・何本・程本・子彙本・兩京遺編本・朱本・『賈長沙集』・四庫全書本・盧本・王謨本・和刻本・王耕心本も同じ。小尾郊一は「阡陌」を「田畑のあぜ道」と解し（『文選（文章編）六）、吉田賢抗は「道路のこと。東西の道路を阡といい、南北を陌という」とする（『史記一（本紀）』）。盧文弨は「『阡陌』は漢書と（同じ）。史記は竝びに『什伯』に作る」と言う。『史記』秦始皇本紀は「什伯」、陳涉世家は「仟佰」、『羣書治要』は「什佰」に作る。王念孫は「『阡陌』は本と『什伯』に作る。此れ『什伯』に因りて誤りて『仟伯』

に作る。故に又た誤りて『阡陌』に作りしのみ。今本漢書及び史記陳涉世家・賈子・文選皆な誤りて『阡陌』に作る。唯だ秦始皇本紀のみ『什伯』に作る。集解は漢書音義の『首を十長百長の中より出だす』と曰へるを引く。如淳は『時に皆な辟屈して十百の中に在り』と曰ふ。此れに據れば、則ち正文及び如注は皆な本と什伯に作りしこと、明らかなり。陳涉世家索隱も亦た『什伯』に作り、注に『十人百人之長に在りしを謂ふなり』と云ふ。匈奴傳索隱に續漢書百官志の『里魁は一里百家を掌り、什主は十家、伍長は五家なり』と云ふを引き、又た過秦論の『什百の中に俛起す』と云ふを引く。此れ皆な其の明證なり。上に『行伍』と言ふ、故に下に什伯と言へるなり。淮南兵略篇に所謂る『正行伍連什伯』なり。或るひと、陳涉は田間より起これば、當に『阡陌』に作る者を以て是と爲すべしと謂へるは、陳涉は大澤より起こりしは、乃ち屯長たりし時の事にして、耕夫たりし時の事に非ざるを知らず。上文に先に『氓隸の人』と言ひ、後に『遷徒の徒』と言ふ。此の文の『行伍』・『什伯』は皆な『遷徒の徒』を承けて之を言ふ。下文の『適戍の衆』も又た『行伍』・『什伯』を承けて之を言ふ。『躡足行伍之閒、免起什伯之中、率罷散之卒、將數百之衆』の四句は、一意にして相ひ承け、皆な戍卒を謂ひしなり。若し『阡百』に作れば、則ち上下の文と類せざるなり」と言う（『讀書雜志』）。兪樾は「『阡陌』も亦た當に史記に從ひて『什伯』に作るべし。十人を什と爲し、百人を伯と爲す。軍法を以て言はば、卽ち上文に所謂る『行伍之閒』なり」と言う（『諸子平議』、賈子一）。王耕心は「盧本及び漢書・文選は文のごとし。史記は竝びに『什伯』に作る。愚按ずるに、（中略）『阡陌』に作る、皆な是なり」と言う（『賈子次詁』校詁一）。瀧川龜太郎は「（什伯と阡陌とは）義を取るに同じからず。什伯は行伍を以て言ひ、阡陌は畝畝を以て言へば、『什伯』の義 長なり」と言う（『史記會注考注』、秦始皇本紀）。祁玉章もまた、「此の文、『甕牖繩樞之子』より起こりし數句は、其の田間に出身せしを言ひ、『躡足行伍之閒』より以下數句は、其の起義して秦を攻むるを言ふ。此くのごとく分かちて兩截と作して讀みて、語意は至りて明らかなれば、則ち『阡陌』は當に『什伯』の誤りと爲すべし。王懐祖（念孫）・兪蔭甫（樾）の說 是なり」と言う（『賈子新書校釋』）。今、「什伯」に改める。また『藝文類聚』帝王部一（總載帝王）所引の過秦論では「非有仲尼墨翟之賢～俛起什伯之中」を缺く。

（２０）「率疲弊之卒」、盧文弨は「潭本は『率罷散之卒』に作り、史記に同じ」と言う。『史記』秦始皇本紀・陳涉世家・『文選』・『藝文類聚』・『太平御覽』兵部三一（卒）・『賈長沙集』・王耕心本は「率罷散之卒」、兩京遺編本は「率罷散之卒」、『漢書』陳勝項籍傳は「帥罷散之卒」、『羣書治要』・何本・程本・子彙本・朱本・四庫全書本・王謨本・和刻本は「率疲散之卒」に作る。顏師古は「『罷』は、讀みて疲と曰ふ」と言う（『漢書』注）。王耕心は「盧本、『率』は文のごとく、諸家も同じ。惟だ漢書は『帥』に作る。『罷散』、盧本は『疲弊』に作るも、史・漢・文選は皆な文のごとし（『罷散』）。愚按ずるに、諸家の是非各の異なれり。今、參訂して文のごとくす」と言う（『賈子次詁』校詁一）。今、原文に據る。

（２１）「轉而」、盧文弨は「史記は『轉而』倒なり」と言う。『史

記』秦始皇本紀は「而轉」に作る。王耕心は「史記秦始皇本紀は『而轉攻秦』に作る。盧本は文のごとく、諸家も同じ。是なり。今、原文に仍る」と言う（『賈子次詁』校詁一）。なお、『藝文類聚』帝王部一（總載帝王）所引の過秦論では「斬木爲兵～贏粮而景從」を欽く。

（２２）「竿」、四部叢刊本はもと「干」に作る。朱駿聲（一七八八～一八五八）『說文通訓定聲』一四に「干」について、「又た竿に爲る。詩（鄘風、干旄）の『孑孑干旄』、禮記檀弓（上）の『寢苫枕干』は、按ずるに猶ほ梃のごとし。注、『盾』に訓むは、之を失せり」と言う。『史記』秦始皇本紀・陳涉世家・『漢書』陳勝項籍傳・『文選』・『羣書治要』・何本・程本・子彙本・兩京遺編本・朱本・『賈長沙集』・盧本・王謨本・和刻本・王耕心本は皆な「竿」に作る。今、「竿」に改める。

（２３）「合」、『史記』秦始皇本紀・『文選』・『羣書治要』・『賈長沙集』・王謨本・王耕心本は「集」、『史記』陳涉世家・何本は「會」に作る。また、盧文弨は「潭本、『合』の下に『而』字有り」と言う。『文選』・兩京遺編本・和刻本は「而」字有り。王耕心は「盧本、『集』は『合』に作り、漢書も同じ。史記陳涉世家は『會』に作る。文選は『集』下に『而』字有り。史記秦始皇本紀・文選は文のごとし。是なり。『而』は、衍文なれば、今、改正す」と言う（『賈子次詁』校詁一）。

（２４）「響」、四部叢刊本は「嚮」に作り、『漢書』陳勝項籍傳・四庫全書本も同じ。『史記』秦始皇本紀・陳涉世家・『文選』・『羣書治要』・何本・程本・子彙本・兩京遺編本・朱本・『賈長沙集』・盧本・王謨本・和刻本・王耕心本は「響」に作る。過秦下には「必無響應之助」と有れば、今、改める。

（２５）「贏」、『史記』秦始皇本紀・陳涉世家・『漢書』陳勝項籍傳・『羣書治要』・盧本・王耕心本は「羸」に作り、『文選』は「嬴」、程本・朱本・王謨本は「贏」に作る。瀧川龜太郎は「『羸』は、當に『羸』に作るべし。裹と同じ、包なり」と言う（『史記會注考證』、秦始皇本紀）。「粮」、『史記』秦始皇本紀・陳涉世家・『漢書』陳勝項籍傳・『文選』・『羣書治要』・何本・程本・子彙本・兩京遺編本・朱本・『賈長沙集』・盧本・王謨本・和刻本・王耕心本は「糧」に作る。『莊子』胠篋「羸糧而趣之」や『荀子』議兵に「羸三日之糧」と有るが、『集韻』に「糧は、或ひは粮に作る」と有るので、今、改めず。

（２６）「俊」、何本・程本・子彙本・朱本・盧本・王謨本・和刻本・王耕心本は「傑」に作る。盧文弨は「潭本、『傑』は『俊』に作り、又た一『遂』字有り」と言う。また、『史記』秦始皇本紀・陳涉世家・陳勝項籍傳・『文選』・『羣書治要』・何本・程本・子彙本・兩京遺編本・朱本・『賈長沙集』・四庫全書本・王謨本・和刻本・王耕心本・王耕心本は下に「遂」字有り。王耕心は「史・漢・文選、『傑』は『俊』に作る。盧本は文のごとく、王謨及び諸本も同じ。愚按ずるに、『傑』に作る、是なり。上文の『豪俊』は賢材を謂ふなり。此の文の『豪傑』は雄傑の人を謂ふなり。文は近似すとも、而も實は同じからず。陳涉世家に屢ば言へる『三老豪傑を召す』、『國の豪傑を

徵す』及び『貴人豪傑』は、卽ち此に所謂る『豪傑』なり。史・漢・諸家皆な上文と比して而して之を一とするは、謬れり。惟だ盧及び諸本のみ、舊文僅かに存す。今、據りて定むること文のごとくし、摹棱を取る無きなり」、「盧本、『遂』字無し。潭本は文のごとく、史・漢・文選も同じ。是なり。今、補正す」と言う（『賈子次詁』校詁一）。今、「遂」を補う。

（27）「並」、『藝文類聚』は「蜂」、程本・盧本・王耕心本は「竝」に作る。

（28）「矣」、『摹書治要』・兩京遺編本・四庫全書本は「矣」に作る。

【既沒】吉田賢抗は「始皇崩ずといわないで、『沒』を用いたところに、過秦の意がある」と言う（『史記一（本紀）』）。確かに『禮記』曲禮下には「天子の死を崩と曰ふ」と言うが、『論語』子罕には「文王既に沒したれども、文は茲に在らずや」、『孟子』滕文公下にも「堯・舜既に沒して、聖人の道は衰ふ」というような例が有り、「沒」だからといって、そこに貶意が有るや否やは判じ難い。確かに、『賈誼新書』では、耳痺には「闔閭沒して而して夫差即位す」と有るのに對し、大政上には「故に堯・舜・禹・湯の天下を治むるや、所謂る明君なり。士民は之を樂しみ、皆な即位百年して、然る後に崩じ、士民は猶ほ以て大數と爲すなり」、禮容語にも「故に周の平王既に崩じて以後、周室は稍稍衰弱するも墜ちず」と有り、天子の死には「崩」、諸侯には「沒」との使い分けがあるかに見えるが、「始皇」を「秦王」とすることと共に慎重な檢討を要する。

【餘威震於殊俗】瀧川龜太郎は「西方の諸國、禹域を稱して支那と曰ひ、又た震旦・眞丹に作るは、皆な秦字の引音なれば、亦た以て秦の威 殊俗に振るふを見るべきなり」と言う（『史記會注考證』、秦始皇本紀）。「殊俗」は、風俗を異にする地域。先祖代々の威勢が風俗を異にする様々な地域にも鳴り響き、動かすこと。

【陳涉】『史記』陳涉世家に「陳勝とは、陽城の人なり、字は涉なり」と有る。人に雇われて農耕に從事していたと言うから、貧しい出身であった。紀元前二〇九年に蜂起し、一時は張楚を國號として王位に卽くも、部下莊賈によって殺害された。『賈誼新書』屬遠には「秦に及びては而ち然らず、秦は尺寸の地も分かつ能はず、盡く自ら之を有せんと欲するのみ。輸將は海上よりして而して來たり、一錢の賦のみなるに、十錢の費あれば、輕しくは致す能はざるなり。上の得る所の者甚だ少なく、而も民の毒苦すること甚だ深し、故に陳勝一たび動けば、而ち天下振るはず」とも有る。また、『淮南子』兵略には「戍卒陳勝、大澤に興り、攘臂袒右して、稱して大楚と爲せば、而ち天下回應す。此の時に當たりて、牢甲利兵、勁弩強沖有るに非ざるなり、棘棗を伐りて而して矜と爲し、錐や鑿を周れて而して刃と爲し、剡りて筴を揭らし、儋ひし钁を奮ひて、以て修戟強弩に當たりて、城を攻め地を掠せば、降下せざるは莫く、天下は之が爲に麋沸蝗動なれば、雲のごとく徹して席捲し、方は數千里なり。勢位は至賤にして、而して器械は甚だ利あらざるに、然れども一人 唱へて而して天下 之に應ぜしは、積怨 民に在ればなり」と有る。

【甕牖】孔穎達は「甕牖とは、牖牕の圓きこと甕の口のごときを謂

ふなり。又た敗れし甕口を以て牖と爲すと云ふ」と言う（『禮記正義』儒行）。ここでは後者の意。孟康は「瓦甕を窻（窗）と爲す」と言い（『史記集解』、秦始皇本紀所引・『漢書』注所引）、山口察常も「甕の口を窗となすこと」と言う（『國譯賈誼新書』）。

【繩樞】服虔は「繩を以て戸の樞を係ぐ」と言う（『史記集解』、秦始皇本紀所引・『漢書』注所引）。韋昭は「『繩樞』は、繩を以て戸を扃ぎて樞と爲すなり」と言う（『文選』注）。山口察常は「繩を戸のくるるにかけてあけたてすること」と言う（『國譯賈誼新書』）。くるるは、蝶番を用いない開き戸の軸の部分。從って「甕牖繩樞」は、「其の貧しきを極言せし」（『賈子新書校釋』）ものなのである。

【氓隷】如淳は「『甿』は、古の『氓』字なり。『氓』は、民なり」（『史記集解』、秦始皇本紀所引）、あるいは「『甿』は、古の『萌』字なり。『甿』は、民なり」（『漢書』注所引）、「『甿』は、古の『氓』字、氓は人なり」（『文選』注所引）と言う。徐廣は「田民を甿と曰ふ。音は亡更の反なり」と言うが（『史記集解』、陳涉世家所引）、中井積德は「『甿』とは、田無きの民なり」と述べている（『史記雕題』）。「隷」については、顏師古が「隷は、賤なり」と言うように（『漢書』武五子傳注）、賤役に從事する者を指す。いずれにせよ、「氓隷」とは「下賤なるもの」（山口察常『國譯賈誼新書』）を指すのであろう。

【遷徙之徒】山口察常は「罪あって流されたもの」と言う（『國譯賈誼新書』）。謫せられた者。しかし、中井積德は「陳涉は戍の行くの人にして、戍畢はらば當に還るべし。曾て遷徙の事無し」と言う（『史記雕題』）。

【中人】普通の人。「中庸」について、李善は「『方言』に、『庸は賤稱なり』と曰ふ。言ふこころは、中等の庸人にも及ばず、となり」と言う（『文選』注）。『淮南子』繆稱に「言に常是無く、行に常宜無き者は、小人なり。一事に察しく、一伎に通ずる者は、中人なり。兼ねて覆蓋して而して並びに之有り、伎能を度りて而して裁して之を使ふ者は、聖人なり」と有り、「聖人-中人-小人」の別が示されている。また、『呂氏春秋』贊能に「賢者は人に善くするに人を以てし、中人は事を以てし、不肖者は財を以てす」と有り、「賢者-中人-不肖者」となっている。

【仲尼】孔丘（前五五二～前四七九）、字は仲尼、魯の人、春秋時代の思想家・政治家・教育家。

【墨翟】文穎は「墨翟は、宋の人、墨家を爲す者なり」と言う（『漢書』注所引）。その生涯については『史記』孟子荀卿列傳に「蓋し墨翟は、宋の大夫ならん。善く守御して、節用を爲す。或ひは孔子の時に并ぶと曰ひ、或ひは其の後に在りと曰ふ」と有るのみで、前漢初期には既に曖昧な記憶と化していたことがわかる。何孟春は「晁氏客語に、或るひと賈誼を問ふ。程子曰く、『誼の言に曰く、「孔子・墨翟の賢有るに非ず」と。孔と墨と一に之を言へるは、其の識未だしなり。其れ亦た善く學ばざればなり』と」と言う（『訂註賈太傅新書』）。この程子の語は、今は『河南程氏遺書』卷二五（伊川先生語十一）に見え、「未」は「末」に作る（『二程集』）。『賈誼新書』過秦下に「陳涉は湯武の賢を用いず、公侯の尊を藉りず」と有る。

【陶朱】顏師古は「越の人范蠡、越を逃れて、陶に止まり、自ら陶

朱公と謂ふ」と言う（『漢書』注）。裴駰は「太史公素王妙論に『蠡は本と南陽の人なり』と曰ふも、列仙傳に『蠡は、徐の人なり』と云ふ」と言い（『史記集解』、越王句踐世家）、司馬貞は「呉越春秋に『蠡、字は少伯、乃ち楚の宛の三戸の人なり』と云ふ。越絶に『越に在りては范蠡と爲し、齊に在りては鴟夷子皮と爲し、陶に在りては朱公と爲す』と云ふ。（後略）」と言う（『史記索隱』、越王句踐世家）。『史記』越王句踐世家に「范蠡、海に浮ひて齊に出て、姓名を變へ、自ら鴟夷子皮と謂ひ、海畔に耕し、身を苦しめ力を戮はせて、父子ともに產を治む。居ること幾何無くして、產を致すこと數十萬。齊人は其の賢なるを聞きて、以て相と爲す。范蠡 喟然として嘆じて曰く、『家に居れば則ち千金を致し、官に居れば則ち卿相に至るは、此れ布衣の極みなり。久しく尊名を受くるは、不祥ならん』と。乃ち相印を歸して、盡く其の財を散じて、以て知友鄕黨に分け與へて、而して其の重寶を懷きて、閒行して以て去り、陶に止まりて、以爲へらく此れ天下の中にして、有無を交易するの路通ずれば、生を爲さば以て富を致すべけん、と。是に於いて自ら陶の朱公と謂ふ。復た約要して父子ともに耕畜し、居を廢し、時を候ひて物を轉じ、什一の利を逐ふ。居ること何も無くして、則ち貲を致すこと巨萬を累ぬ。天下、陶の朱公を稱ふ」と有り、貨殖列傳にも關連記事が有る。故に李善は「史記に曰く、『范蠡は陶に之きて朱公と爲り、以爲へらく陶は天下の中、皆な諸侯四通し、貨物の交易する所なり、と。乃ち產を治めて、積むこと十九年の間に三たび千金を致す』と」と言う（『文選』注）。また、『列仙傳』にも「范蠡は、字は少伯、徐の人なり。周の師太公望に事へて、桂を服し水を飲むを好む。越の大夫と爲り、勾踐を佐けて呉を破る。後に舟に乘りて海に入り、名姓を變へて、齊に適き、鴟夷子と爲る。更に後百餘年、陶に見れて、陶の朱君と爲り、財は億萬を累ね、陶の朱公と號せり。後に之を棄てて、蘭陵にて藥を賣れり。後人世世之を識見す」と言う。『賈誼新書』には「梁王曰く、『陶朱の叟、布衣を以てして而して富は國に侔し、是れ必ず奇智有らん』と」（連語）、「事濟り功成れば、范蠡 室を負ひて而して五湖に歸る」（耳痺）と有る。『韓非子』解老に「夫れ道理を棄てて而して擧動を忘るる者は、上に天子諸侯の勢の尊きこと有りて、而して下に猗頓・陶朱・卜祝の富有りと雖も、猶ほ其の民人を失ひて而して其の財資を亡ふなり」と有り、陶朱公と猗頓を並べる例が有る。また、武帝期の徐樂の言にも「陳涉（中略）孔・墨・曾子の賢、陶朱・猗頓の富有るに非ず」と有る（『史記』平津侯主父列傳）。

【猗頓】顏師古は「猗頓は、本と魯の人にして、大いに牛羊を猗氏の南に畜ひて、貲は王公に擬へ、名を天下に馳す」と言う（『漢書』注）。『孔叢子』陳士義には「猗頓は、魯の窮士なり、耕しては則ち常に飢え、桑うえては則ち長く寒ゆ。陶の朱公富めるを聞きて、往きて而して術を問ふ。朱公 之に告げて曰く、『子速かに富まんと欲すれば、當に五牸を畜ふべし』と。是に於いて、乃ち西河に適きて、大いに牛羊を猗氏の南に畜ふ。十年の間、其の滋息すること計ふべからざれば、貲は王公に擬ひ、名を天下に馳せて、以て富を猗氏に興せり」と有り、裴駰（『史記集解』、貨殖列傳・李善（『文選』注）も引く。しかし、『史記』貨殖列傳には「猗頓は鹽鹽を用て起こる」

と言い、鹽業によって興ったとする。また、『淮南子』氾論には「故に劍工 劍の莫邪の似き者に惑ふも、唯だ歐冶のみ能く其の種に名づく。玉工 玉の碧盧の似き者に眩ふも、唯だ猗頓のみ其の情を失はず」と有るによれば、玉業とも關連があったか。先述の『韓非子』解老や『史記』平津侯主父列傳の他、『鹽鐵論』力行・復古や『法言』學行にも「猗頓之富」と有る。

【躡足】如淳は「『躡』は、音は疊なり」と言い、李善もこれを引く（『文選』注）。顔師古は「『躡』は、音は女涉の反なり」と言う（『漢書』注）。『說文解字』に「躡は、蹈なり」と有る。踏む。吉田賢抗は「驅けまわる」とする（『史記一（本紀）』）。

【行伍】吉田賢抗は「兵列。二十五人を行といい、五人を伍という」（『史記一（本紀）』）、呉雲・李春台は「戍兵の隊伍」（『賈誼集校注』）、饒東原は「士卒の行列」（『新譯新書讀本』）、李爾鋼は「軍隊」（『新書全譯』）とする。

【俛起什伯之中】「倔起什伯之中」（『史記』秦始皇本紀）について、『漢書音義』に「首、十長百長の中より出づ」と有る。また「倔起仟佰之中」（『史記』陳涉世家）について、司馬貞は「『仟佰』は千人百人の長を謂ふなり、音は千百なり」と言う（『史記索隱』、陳涉世家）。上文に「躡足行伍之間」とあるので、「什伯」「仟佰」はいずれも軍中の小隊長を意味するとした方がよかろう。『史記』陳涉世家に陳涉も呉廣も「屯長」であったと有る。「俛起」について、小尾郊一が「伏したり起きたりすること。轉じて生活のこともいう」とする（『文選（文章編）六）のは陳涉世家に「俛仰」と有り、如淳が「時に皆な辟屈して十百の中に在り」と言う（『史記集解』）のに依るのだろうが、後文を考えると「起」には身を起こす、擡頭の意が有ると見た方がよい。故に『史記』は「倔起」に作り、小隊長の中から擡頭するとするのであろう。また、顔師古は如說を引いた上で、「『免』とは、徭役を免れ脱するを言ふなり。『免』字は或ひは『俛』に作り、讀みて俯と同じ」と言う（『漢書』注）。何孟春は「俛」について「音は免なり」と言う（『訂註賈太傅新書』）。『漢書』の様に「免起」に作れば、徭役を逃れて小隊長の中から身を起こす意となろうか。

【疲弊】心身ともに疲れ果て、傷んでいること。中井積德は「疲卒數百木兵竿旗は是れ陳涉初めて起ちしときの事のみ。既に陳に至れるときには則ち車は七百乘・卒は數萬にして、而して其れ王と爲る。之を沈むる者、豈に之のごときの陋なるかな。且つ涉は陳に王たるも、未だ遽かに秦を攻めざるなり、乃ち師を遣りて西のかた伐たしむるのみ。是に於いて、車は千乘、卒は數十萬なり。賈生の言、皆な事實を失へり」と言う（『史記雕題』）。

【揭】顔師古は「『揭』は音は竭、之を竪てるを謂ふなり。今の之を讀む者、負揭の揭と爲せるは、非なり」と言う（『漢書』注）。李善は「（張揖）『埤蒼』に『「揭」は、高く擧ぐなり』と曰ふ。巨列の切なり。莊子（庚桑楚）に『竿を揭げて諸海を求む』と曰ふ」と言う（『文選』注）。

【贏】顔師古は「『贏』は、擔なり」と言う（『漢書』注）。李善は「莊子（胠篋）に曰く、『今、民をして「某所に賢者有り」と曰はしむれば、糧を贏ひて而して之に趣く』と。方言に曰く、『贏は、擔なり』と。音は盈なり」と言う（『文選』注）。『荀子』議兵「贏三日之糧」

注に「贏は、負擔なり」と言う。背負うの意。ただし、過秦下には「屋を望みて而して食す」と有り、陳涉の軍が食糧は略奪に頼っていたとする。

【景從】顏師古は『『景從』は、影の形に隨ふがごときを言ふなり」と言う（『漢書』注）。影の様につき從うこと。

【山東】清の顧炎武（一六一三～一六八二）『日知錄』卷三一「山東河内」に「古の所謂る『山東』とは、華山以東なり。（中略）蓋し函谷關より以東、總じて之を山東と謂ひて、而して今の但だ齊・魯のみを以て山東と爲すがごときに非ざるなり」と言い、『史記會注考證』秦始皇本紀もこれを引く。

**1-8且夫天下非小弱也、雍州之地、崤函之固、自若也。陳涉之位、非尊於齊・楚・燕・趙・韓・魏・宋・衞・中山之君也。鉏耰・棘矜、非銛於（鉤）〔句〕戟・長鎩也。適戍之衆、非亢九國之師也。深謀遠慮・行軍用兵之道、非及鄉時之士也。然而成敗異變、功業相反、何也。**

且つ夫の天下は小弱に非ざるなり、雍州の地、崤函の固めは、自若たり。陳涉の位は、齊・楚・燕・趙・韓・魏・宋・衞・中山の君より尊きに非ざるなり。鉏耰・棘矜は、鉤戟・長鎩より銛きに非ざるなり。適戍の衆は、九國の師に亢たるに非ざるなり。深く謀り遠く慮り、軍を行り兵を用いるの道は、鄉時の士に及ぶに非ざるなり。然り而して成敗は變を異にし、功業は相ひ反するは、何ぞや。

【口語譯】

なおかつ、その時の秦の天下は既に小さく弱いものではなく、雍州の地、崤函の守りは、往時のままであった。それなのに、陳涉の位は、齊・楚・燕・趙・韓・魏・宋・衞・中山の君主たちより尊いという譯では無かった。また、陳涉の軍が手にしていた鋤や戟の柄は、連合軍が持っていた鉤戟・長鎩より鋭いものでは無かった。陳涉が率いた謫戍の衆も、九國の軍隊に對抗できるものでは無かった。さらには深く謀りごとをめぐらし先のことまで見越し、軍を動かし兵を用いる方法は、往時の諸士に及ぶものでは無かった。しかしながら、その成敗は異なり、その功業は互いに反するものとなったのは、何故か。

（1）『史記』陳涉世家・『漢書』陳勝項籍傳は「夫」字無し。王耕心は「史記陳涉世家・漢書には『夫』字無し。盧本は文のごとく、史記秦始皇本紀・文選も同じ。愚按ずるに、『夫』字無きは文義備はらず、非なり。今、原文に仍る」と言う（『賈子次詁』校詁一）。『經典釋詞』一〇に「夫は、指事の辭なり」と有る。

（2）「崤」、『史記』秦始皇本紀・陳涉世家・『漢書』陳勝項籍傳・『文選』・『羣書治要』・『賈長沙集』・王耕心本は「殽」に作る。

（3）「函」、四部叢刊本・程本・子彙本・兩京遺編本は「凾」、王耕心本は「函」に作る。

（4）「也」、『羣書治要』は無し。

（５）「非尊」、『漢書』陳勝項籍傳は「不齒」、程本・子彙本・朱本・王謨本・和刻本は「不尊」に作る。顔師古は「『齒』（『漢書』）は、齊列すること齒のごときを謂ふ」と言う（『漢書』注）。つまり、「不齒」は竝ぶことがない、等しくないの意。王耕心は「漢書は『不齒』に作るも、盧本は文のごとく、諸家も同じ。是なり。今、原文に仍る」と言う（『賈子次詁』校詁一）。

（６）「燕」、何本は「萬」に訛る。

（７）「**韓**」、『史記』秦始皇本紀・陳涉世家・『漢書』陳勝項籍傳・『文選』・何本・程本・子彙本・兩京遺編本・朱本・『賈長沙集』・四庫全書本・盧本・王謨本・和刻本・王耕心本は「韓」に作り、『藝文類聚』は無し。

（８）「衞」、『文選』・程本・子彙本・兩京遺編本・『賈長沙集』・四庫全書本・王謨本は「衛」に作る。

（９）『史記』秦始皇本紀・『漢書』陳勝項籍傳は「也」字無し。王耕心は「史記秦始皇本紀・漢書は『也』字無し。盧本は文のごとく、陳涉世家・文選も同じ。是なり。今、原文に仍る」と言う（『賈子次詁』校詁一）。なお、『羣書治要』は「齊楚韓魏」の四國を擧げるのみ。

（１０）「鉏」、『文選』・『藝文類聚』は「鋤」に作る。『集韻』には「鉏は、（中略）或ひは鋤に作る」と有る。王耕心は「盧本は文のごとく、諸家も多く同じ。惟だ文選のみ、『鉏』は『鋤』に作る。（中略）愚按ずるに、説文にては『鉏』を正文と爲せば、是なり。（中略）今、原文に仍る」と言う（『賈子次詁』校詁一）。

（１１）「耰」、『史記』秦始皇本紀は「櫌」に作る。『說文解字』に「櫌は、田を摩（な）らすの器なり」と有り、中井積德は「『櫌』・『耰』、同じく田を摩らすの器なり」と言う（『史記雕題』）。王耕心は「盧本は文のごとく、諸家も多く同じ。（中略）史記秦始皇本紀、『耰』は『櫌』に作る。愚按ずるに、（中略）『耰』は經子諸家皆な『耰』に作る。亦た當に耒に从ふを旨て正と爲す。今、原文に仍る」と言う（『賈子次詁』校詁一）。

（１２）「非銛」、『史記』秦始皇本紀・『羣書治要』・王耕心本は「非鋏」、何本・程本・子彙本・朱本・王謨本・和刻本は「不銛」、『漢書』陳勝項籍傳・盧本は「不敵」に作る。何孟春は「一に『鋏』に作る」と言い（『訂註賈太傅新書』）、盧文弨は「潭本、『不敵』は『非銛』に作り、『銛』、始皇本紀は『鋏』に作る。『鋏』と『銛』とは同じ」と言う。徐廣は「『鋏』は、一に『銛』に作る」と言う（『史記集解』、秦始皇本紀所引）。李善は「銛」について、音は「息鹽」の反だ、と言う（『文選』注）。王耕心は「盧本は『不敵』に作り、漢書も同じ。潭本は『非銛』に作り、史記陳涉世家・文選も同じ。惟だ秦始皇本紀のみ文のごとし（『非鋏』）。愚按ずるに、『不敵』は殊に謬れり。『鋏』・『銛』は皆な説文の正字なれば、是なり。今、改正して文のごとくす」と言う（『賈子次詁』校詁一）。上文に「非尊」、下文に「非抗」・「非及」とあれば、ここも「非銛」もしくは「非鋏」が適當であろう。『集韻』に「銛は、或ひは鋏に作る」と有るが、今、「弔屈原文」に「鉛刀爲銛」と有るので、原文のままとする。

（１３）「於」、『羣書治要』は無く、何本は「於」に作る。

（１４）「句」、四部叢刊本はもと「鈎」に作り、兩京遺編本・四庫全書本・和刻本も同じ。『史記』秦始皇本紀・陳涉世家・王耕心本は「句」、『漢書』陳勝項籍傳・『文選』・何本・程本・子彙本・朱本・『賈長沙集』・盧本・王謨本は「鉤」に作る。王耕心は「盧本、『句』は『鉤』に作り、漢書・文選も同じ。史記は文のごとし。愚按ずるに、說文に『句は、曲なり』とあり。『句戟長鎩』は、對待の文なれば、『句』に作る、是なり。今、改正す」と言う（『賈子次詁』校詁一）。

（１５）「鎩」、『史記』陳涉世家は「鍛」に訛る。なお、『羣書治要』は「句戟長鎩」を「長鎩矛戟」に作る。

（１６）『史記』陳涉世家・『漢書』陳勝項籍傳・『羣書治要』は「也」字無し。

（１７）「適」、『文選』は「謫」、何本・程本・子彙本・兩京遺編本・朱本・四庫全書本・盧本・王謨本・和刻本・王耕心本は「謫」に作る。王耕心は「史・漢、『謫』は『適』に作り、文選は『謫』に作る。盧本は文のごとし。愚按ずるに、『謫』は正文たるは、說文に見ゆ。餘は皆な通假なれば、算ふるに足らず。今、原文に仍る」と言う（『賈子次詁』校詁一）。「適」「謫」「謫」、通ずれば、今、改めず。

（１８）「非亢」、『史記』陳涉世家は「非儔於」、『漢書』陳勝項籍傳は「不亢於」に作る。また、『史記』秦始皇本紀・『文選』・『羣書治要』・『藝文類聚』・何本・兩京遺編本・『賈長沙集』・王耕心本は「非抗於」、程本・子彙本・朱本・盧本・王謨本・和刻本は「非抗」、四庫全書本は「非亢於」に作る。盧文弨は「潭本、『非抗』の下に『於』字有りて、史記に同じ」と言う。顏師古は「『亢』は、當なり、讀みて抗と同じ」という（『漢書』注）。王耕心は「『非抗』、盧本は文のごとく、史記秦始皇本紀・文選も同じ。陳涉世家は『非儔』に作り、漢書は『不亢』に作る。『於』字は盧本には無きも、潭本及び史・漢・文選には皆な有り。愚按ずるに、『抗』は乃ち正文、『亢』は通假に屬せば、『抗』に作る、是なり。『不亢』は未だ安からず、『非儔』は尤も謬れり。『於』字無きも亦た曉るべからざれば、今、補正す」と言う（『賈子次詁』校詁一）。「亢」「抗」、通ずれば、今改めず。

（１９）「國」、兩京遺編本は「囡」に作る。

（２０）『史記』秦始皇本紀・『漢書』陳勝項籍傳は「也」字無し。王耕心は「史記秦始皇本紀は『也』字無く、漢書も同じ。諸家は文のごとし。是なり。今、原文に仍る」と言う（『賈子次詁』校詁一）。

（２１）「深」、和刻本は「淡」に作る。「深」「淡」、同じ。

（２２）「鄉時」、『漢書』陳勝項籍傳・『文選』・程本・子彙本・朱本・『賈長沙集』・四庫全書本・盧本・王謨本・和刻本・王耕心本は「曩時」、『羣書治要』は「向時」に作る。何孟春は「（鄉は）去聲なり。一に『曩』に作る」と言い（『訂註賈太傅新書』）、盧文弨は「潭本は『鄉時』に作り、史記に同じ」と言う。王耕心は「史記は『鄉時』に作るも、盧本は文のごとく、漢書・文選も同じ。愚按ずるに、『曩』・『嚮』の義同じなれど、『鄉』は通假に屬せば、『曩』に作る、是なり。今、原文に仍る」と言う（『賈子次詁』校詁一）。今、改めず。

（２３）「何也」、『史記』秦始皇本紀・陳涉世家・子彙本・盧本・

王耕心本は「何」の一字無く、盧文弨は「潭本は『也』上に『何』字有り」と言う。『文選』・『羣書治要』・『賈長沙集』は「何也」二字無く、『賈長沙集』は「也」字無し。王耕心は「漢書は『反』の下に『何』字有りて、文選は『也』字無し。盧本は文のごとく、史記も同じ。愚按ずるに、『何』有りて『也』無きは皆な資を笑ひて辨ずるに足らざるに屬す。今、原文に仍る」と言う（『賈子次詁』校詁一）。今、原文のままとする。

【且夫天下非小弱也】李國翰（？～一六五八）は「秦は天下を兼有す、所以に小弱に非ざるなり」と言う（『史記會注考證』、秦始皇本紀）。しかし、中井積德は「是の時、天下は鼎沸（ていふつ）すれば、秦の號令は關外に行はれず。天下は已に秦の有に非ざればなり。何を以て小弱に非ずと言へるや」と言う（『史記雕題』）。

【自若】顔師古は「『自若』は、猶ほ故のごとしと言ふがごときなり」と言う（『漢書』注）。ここでは、かつて九國の軍隊が侵攻してきた時と同じだ、という意。

【鉏耰棘矜】服虔は「『耰』は、鉏柄なり。鉏柄及び棘を以て矛槿（槿）を作るなり」と言う（『史記集解』、秦始皇本紀・『漢書』注所引）。また、如淳は「『櫌』は、椎塊の椎なり」と言う（『史記集解』、秦始皇本紀所引）。司馬貞は「『鉏耰』は鉏木を謂ふなり。論語（微子）に『耰而不輟』と曰ふ、是れなり。『棘』は、戟なり。『矜』は、戟柄なり、音は勤なり」と言う（『史記索隱』、陳涉世家）。晉灼は「『耰』は、椎塊の椎なり」と言い、顔師古は「服説非なり。『耰』は、田を摩するの器なり。『棘』は、戟なり。『矜』は槿と同じ、槿は矛鋋の杷を謂ふなり。（中略）『耰』は音は憂なり」と言う（『漢書』注）。孟康は「『耰』は、鋤の柄なり」と言い、張晏は「『矜』は音は槿なり。爾雅に曰く、『棘は、戟なり』と。鋤の柄及び戟の槿を言ふなり。『耰』は音は憂、槿は巨巾の切なり」と言う。また、李善は「矜」について、「巨巾」の反だと言う（以上、『文選』注）。何孟春も「『矜』は槿に同じ」と言う（『訂註賈太傅新書』）。中井積德は「『棘』は、今の衝棒の梃の未だ鐵刺を施さざるものなり。『矜』は、戟の柄なり」と言う（『史記雕題』）。山口察常は「鉏耰は、すきの柄、棘矜は、ほこの柄なり」と言う（『國譯賈誼新書』）。過秦下にも「陳涉は（中略）弓戟の兵を用いず、鉏耰・白梃もて（中略）、天下に横行す」と有る。

【銛】『史記』屈原賈生列傳「鉛刀爲銛」に注して、裴駰は『漢書音義』に「銛は利を謂ふ」と言うのを引き（『史記集解』）、司馬貞も「銛は、利なり」と述べている（『史記索隱』）。

【句戟長鍛】如淳は「『鉤戟』は矛に似て、刃の下に鐵有り、横方上鉤曲なり」と言い、また裴駰は「『鍛』、音は所拜の反なり」と言う。（『史記集解』、秦始皇本紀）。顔師古は「『鉤戟』は、戟の刃の鉤のごとく曲がれる者なり。『鍛』は、鈹なり。言ふこころは往者、秦は兵刃を銷かせば、陳涉起ちし時、但だ鉏耰及び戈戟の槿のみを用いて、以て相ひ攻戰す、となり。（中略）『鍛』は音は山列の反なり」と言う（『漢書』注）。李善は「鍛」について、音は「所介」の反だと言い、『説文』の「『鍛は、鈹の鐔有るなり』を引く（『文選』注）。また、四部叢刊本原注には「所賣の切なり、矛なり」と有り、四庫

全書本も同じ。何孟春は「所介の切なり」と言う（『訂註賈太傅新書』）。山口察常は「薙刀長槍のこと」とする（『國譯賈誼新書』）。

【適戍】罪を得て邊境守備に流謫となること。顔師古は「『適』は讀みて謫と曰ひ、罪罰ありて而して行くを謂ふ」と言う（『漢書』注）。李善は「通俗の文に『罪を罰するを謫と曰ふ』と曰ふ。丈厄の切なり」と言う（『文選』注）。

【非亢】瀧川龜太郎は「『抗』は、敵なり、當なり」と言う（『史記會注考證』、秦始皇本紀）。

【深謀遠慮】深く策謀をめぐらし、遠い先のことまで熟慮すること。李善は「史記（貨殖列傳）に『賢人は深く廊廟に謀る』と曰ひ、論語（衞靈公）に『人に遠慮無くんば、必ず近憂有り』と曰ふ」と言う（『文選』注）。中井積德は「深謀遠慮は則ち張（良）・酈（食其）有り、行軍用兵は則ち劉（邦）・項（羽）有れば、皆な曩時の九國を踰へり」と言う（『史記雕題』）。

【鄉時】往時。司馬貞は「『鄉』は音は香亮の反なり。『鄉時』は猶ほ往時のごときなり。蓋し孟嘗・信陵・蘇秦・陳軫の比を謂ふなり」と言う（『史記索隱』、陳涉世家）。顔師古は「『曩』は、昔なり、音は乃朗の反なり」と言う（『漢書』注）。

**1-9試[1]使山東之國[2]與陳涉、度長挈大[3]、比權量力、則[4]不可同年而語矣。[5]然[6]秦以區區之地、致萬乘之勢[7]、序[8]八州而朝同列、百有[9]餘年矣。[10]然後[11]以[12]六合爲家、（殽）〔崤〕[13]函爲宮、一夫作難而七廟[14]墮[15]、身死人手、爲天下笑者、何也。[16]仁義[17]不施、〔而〕[18]攻守之勢[19]異也。[20]**

試みに山東の國と陳涉とをして、長を度り大を挈り、權を比べ力を量らしむれば、則ち年を同じくして而して語るべからざらん。然れども秦は區區の地を以て、萬乘の勢を致し、八州を序して而して同列を朝せしむること、百有餘年なり。然る後に六合を以て家と爲し、崤函もて宮と爲すも、一夫難を作して而して七廟墮たれ、身は人の手に死して、天下の笑ひと爲りしは、何ぞや。仁義施さずして、而して攻守の勢 異なればなり。

【口語譯】

今試みに山東の國々と陳涉とに、その長さや大きさを量り、權力を比べさせたなら、同じ様に語ることはできないだろう。しかしながら、秦は小さい領土によって、萬乘の勢をもたらし、雍州以外の八州を順序よく並べて、他の諸侯達を入朝させるのに百有餘年もの時間を要した。その後ようやく、天地四方を一つの家とし、崤山・函谷の内を居処としたが、たった一人の男が叛亂を起こしただけで、その秦の七廟は破壞され、その身は人の手に殺されて、天下の笑い者となってしまった。それはいったいどうしたことか。それは仁義を施すことがなく、攻守の勢が異なっていたからに他ならない。

（1）『史記』陳涉世家は「試」の上に「嘗」字が有る。王耕心は「史記陳涉世家、『試』の上に『嘗』字有り。盧本は文のごとく、諸家も同じ。是なり。今、原文に仍る」と言う（『賈子次詁』校詁一）。

（2）「國」、兩京遺編本は「國」に作る。

（3）「挈大」、盧文弨は「潭本は『挈大』に作る」と言うが、『史記』秦始皇本紀・陳涉世家・『漢書』陳勝項籍傳・『文選』・子彙本・盧本・和刻本・王耕心本は「絜大」に作る。「挈」「絜」は同じ。『漢書音義』に「『絜束』の『絜』なり」と言う（『史記集解』、秦始皇本紀所引）。なお、『藝文類聚』は「契大」、『羣書治要』・何本・程本・朱本・『賈長沙集』・四庫全書本・王謨本は「絜」、兩京遺編本は「挈大」に作る。

（4）『漢書』陳勝項籍傳は「則」字無し。王耕心は「漢書は『則』の字無し。盧本は文のごとく、史記・文選も同じ。是なり。今、原文に仍る」と言う（『賈子次詁』校詁一）。

（5）「矣」、『羣書治要』・兩京遺編本・四庫全書本は「矣」に作る。

（6）『史記』陳涉世家は「然」の下に「而」字有り。王耕心は「史記陳涉世家は『然』の下に『而』字有り。盧本は文のごとく、諸家も同じ。是なり。今、原文に仍る」と言う（『賈子次詁』校詁一）。

（7）「以」、王耕心本は「㠯」に作る。

（8）「致萬乘之勢」、『史記』秦始皇本紀・『羣書治要』・王耕心本は「千乘（乘）之權」、『史記』陳涉世家・『漢書』陳勝項籍傳・『文選』・『藝文類聚』・何本・程本・子彙本・朱本・『賈長沙集』・王謨本・和刻本は「致萬乘之權」に作る。盧文弨は「始皇本紀は『致』字無く、『千乘之權』に作る。陳涉世家は『致萬乘之權』に作る」と言う。兪樾は「『致』字は衍文なり。『萬乘』は當に史記に從ひて『千乘』に作るべし。『區區之地』は其の地の小さきを言ふなり。『序八州』と相ひ對す。『千乘の勢』は、其の勢の弱きを言ふなり。『朝同列』と相ひ對す」と言う（『諸子平議』、賈子一）。王耕心は「盧本は『致萬乘之埶』に作るも、史記陳涉世家は『致萬乘之權』に作り、漢書・文選も同じ。秦始皇本紀は文のごとし（『千乘之權』）。愚按ずるに、『區區』は其の地の小さきを言ひ、『千乘』は其の埶の弱きを言ふ。皆な秦の先世を原ねて言を爲せば、蓋し孝公の時を謂へるならん。『致萬乘』字は文義當たるに非ざれば、蓋し妄竄より出でしならん。兪氏の說も同じく、文のごとし、是なり。今、改正す」と言う（『賈子次詁』校詁一）。王耕心の指摘するように、下文に「百有餘年」と有るから、ここで述べているのは惠文王や昭襄王・武王の時代である。ただし、「千乘」か「萬乘」かは判斷できない。「千乘」の場合は「致」は衍、「萬乘」の場合は「致」が無ければ文意が通じない。

（9）「序」、『史記』秦始皇本紀・『漢書』陳勝項籍傳・『文選』・『羣書治要』・『藝文類聚』・何本・程本・子彙本・朱本・『賈長沙集』・四庫全書本・王謨本・和刻本は「招」、『史記』陳涉世家・王耕心本は「抑」に作る。何孟春は「（『招』は）音は翹なり。一に『序』に作り、又た『抑』に作る」と言い（『訂註賈太傅新書』）、盧文弨は「陳涉世家、『序』は『抑』に作り、始皇本紀は『招』に作り、漢書も同じ」と言う。兪樾は「『序』とは、之を次弟するなり。陳涉世家『仰』に作りしは、蓋し字の誤りならん。因りて而して始皇本紀も又た誤りて『招』と爲せり」と言う（『諸子平議』、賈子一）。王耕心は「史記秦始皇本紀・漢書・文選、『抑』は皆な『招』に作る。盧本は『序』に作り、陳涉世家は文のごとし。愚按ずるに、文のごと

し、是なり。今、改正す。『序』に作るは、未だ安からず。『招』は乃ち『抑』字形近きの誤りなり。兪説必ず『序』を㠯て是と爲すは、非なり」と言う（『賈子次詁』校詁一）。しかし、「招」「抑」「序」はそれぞれ意味は異なるものの通じる。今、原文に據る。

（１０）「有」、盧文弨は「『有』字は潭本無し」と言う。兩京遺編本は「有」字無し。

（１１）『漢書』陳勝項籍傳は「矣」字無し。王耕心は「漢書には『矣』字無きも、盧本は文のごとく、史記・文選も同じ。愚按ずるに、『矣』無きは謬れること甚だし。今、原文に仍る」と言う（『賈子次詁』校詁一）。『羣書治要』・兩京遺編本・四庫全書本は「矣」に作る。

（１２）「後」、『史記』秦始皇本紀・『漢書』陳勝項籍傳は「后」に作る。顔師古は「『后』と『後』とは同じ、古へ通用するの字なり」と言う（『漢書』注）。王耕心は「史記秦始皇本紀、『後』は『后』に作り、漢書も同じ。盧本は文のごとく、陳涉世家・文選も同じ。愚按ずるに、『後』は乃ち正文、『后』は通假に屬せば、必ず『后』に作るは謬れり。今、原文に仍る」と言う（『賈子次詁』校詁一）。

（１３）「以」、王耕心本は「㠯」に作る。

（１４）四部叢刊本はもと「殽」に作り、『史記』秦始皇本紀・陳涉世家・『漢書』陳勝項籍傳・『文選』・『賈長沙集』・四庫全書本・王耕心本も同じ。しかし、何本・程本・子彙本・兩京遺編本・朱本・盧本・王謨本・和刻本は「崤」に作る。上文に合わせて、「崤」に改める。

（１５）「函」、四部叢刊本・程本・子彙本・兩京遺編本は「凾」、王耕心本は「函」に作る。

（１６）「墮」、盧文弨は「潭本は『隳』に作る」と言う。『文選』・『藝文類聚』・兩京遺編本は「隳」、程本は「墮」に作る。何孟春は「『隳』と同じ」と言う（『訂註賈太傅新書』）。

（１７）「何也」、『羣書治要』は無し。

（１８）「仁義」、『漢書』陳勝項籍傳は「仁誼」、盧本は「仁心」に作る。盧文弨は「『仁心』、潭本『仁義』に作るは、史記と同じ。（中略）案ずるに小司馬も亦た『仁心』に作るが似し」と言う。王耕心は「漢書、『義』は『誼』に作り、盧本は『心』に作る。潭本及び史記・文選は皆な文のごとし（『仁義』）。愚按ずるに、『仁義』に作る、是なり。今、改正す。『仁義』は乃ち道德の總會なれば、惟だ『仁心』に作るのみなれば狹し。『誼』は乃ち『仁誼』字の正文なれば、當に漢書に从ひて、適を㠯て賈子の名と爲すべきも、復た諸經と相ひ違へば、今取らず。『義』は則ち『誼』の通假の字なり」と言う（『賈子次詁』校詁一）。過秦下篇には「（秦王は）詐力を先にして而して仁義を後にす」と有るから、「仁義」の方が正しいか。時變篇には「（秦は）六國を壓け、天下を兼せるは、求め得たり。然れども廉恥の節・仁義の厚に反するを知らず、幷兼の法を信じ、進取の業を遂げれば、凡そ十三歲にして而して社稷は墟と爲れり。守成の數・之を得るの術を知らざればなり」とは、過秦論に共通する論理である。また、制不定篇にも「勢已に定まり權已に足らば、乃ち仁義恩厚を以てし、因りて而して之を澤す」と有る。

（１９）「而」、四部叢刊本・兩京遺編本は無し。盧文弨は「潭本は（中略）『而』字無し」と言う。今、補う。

（２０）「勢」、『羣書治要』は「勢」、王耕心本は「埶」に作る。

【度長】顔師古は「『度』は音は徒各の反なり」と言う（『漢書』注）。「度」は、長短をはかること。『漢書』律曆志上に「度とは、分・寸・尺・丈・引なり、長短を度る所以なり」と有る。

【挈大】「挈」は、『集韻』に「通じて絜に作る」と有る。「絜」は、繩を用いて物の周圍をはかること。司馬貞は「『絜』は音は下結の反なり。結束して其の大小を知るがごときを謂ふなり」と言う（『史記索隱』、陳涉世家）。顔師古は「『絜』は之を圍束するを謂ふなり。（中略）『絜』は音は下結の反なり」と言う（『漢書』注）。李善は「莊子（人間世）に『大樹ありて、其の絜は百圍なり』と曰ふ。司馬彪は『絜は、市なり、丁結の切なり』と曰ふ」と言う（『文選』注）。中井積德は「『絜』も亦た比なり」と言い（『史記雕題』）、瀧川龜太郎は「『絜』は、猶ほ度のごときなり」と言う（『史記會注考證』、秦始皇本紀）。

【區區】顔師古は「『區區』は、小さきの貌なり」と言う（『漢書』注）。

【萬乘之勢】周の制度では、天子のみが兵車一萬乘を出すことができるとされていたので、「萬乘」は「天子」を指す。また、戰國時代では大國を「萬乘」と言っている。ここでは、いずれの意味でも通じる。

【序八州而朝同列】「序」について、兪樾は「順序よく竝べる」の意とする。しかし、王耕心は「抑」だとする。司馬貞は「秦強くして而して八州を抑へて己に朝せしむるを謂ふなり。漢書は『招八州』に作るも、亦た通ずるなり」と言う（『史記索隱』、陳涉世家）。鄧展は「『招』は、擧なり」と言い、蘇林は「『招』は音は翹なり」と述べている（『漢書』注・『文選』注）。「八州」は、「雍州を除く外の八州」（山口察常『國譯賈誼新書』）であるが、具體的に何を指すかは定かではない。なお、『賈誼新書』には他に「昔高帝布衣より起こりて而して九州を服すも、今陛下は九州に杖（よ）るも而も匈奴に行はれず」（威不信）や「九州の民、四荒の國」（禮容語下）等と有る。

【一夫】ここでは陳涉を指す。これについて、中井積德は「劉・項諸侯を率いて關に入れば、盖し堂濟（正々堂々）なりしならん。豈に適戍數百の鉏耰棘矜を持つ者有らんや。皆な事實を失へり。賈生は陳涉と九國を以て論を立てて、而して劉・項沒（な）きは、是れ大いに疎なる處なり」と言う（『史記雕題』）。

【七廟】『禮記』王制に「天子七廟、三昭三穆と太祖の廟と而して七あり」と有る。山口察常は「天子は七廟を立つ、卽ち大廟と三昭三穆とこれなり」と言う（『國譯賈誼新書』）。なお、過秦下篇に「二世此の術を行はず、而して重ぬるに無道を以てし、宗廟を壞つ」と有る。

【墮】顔師古は「『墮』は、毀なり、音は火規の反なり」と言う（『漢書』注）。

【天下笑】李善は「春秋考異郵に『君、妻を殺して誅され、天下の笑と爲る』と曰ふ」と言う（『文選』注）。『賈誼新書』には他に、「（楚）懷王逃れて、秦に適くに、克尹 之を西河に殺せば、天下の笑ひと爲る」（春秋）、「齊の桓公（中略）管仲を失ひて、豎刁に任ずれば、而ち身は死すとも葬られず、天下の笑ひと爲る」（胎教）と有る。

【仁義不施】司馬貞は「（『施』は）式豉の反なり。言ふこころは秦

は虎狼の國なれば、其の仁義は天下に施及せず、故に亡ぶを謂ふなり」と言う（『史記索隱』、陳涉世家）。宋の胡寅（一〇九八～一一五六）は「攻守に勢を異にする無く、秦は詐力を以て之を得れば、豈に能く仁義を施すの理有らんや」と言う（『訂註賈太傅新書』所引）。中井積德は「首（はじめ）より尾（しまひ）に至るまで只だ結は此の二句に在り」と言うが、また、「秦は前王も後王も皆な仁義を施さざるなり。九國の時も亦た守なり、陳涉の時も亦た守なり。未だ其の所以の異なれるを覩ず。此の結末の二句は竟に謂はんとする所を解せず」とも言う（『史記雕題』）。しかし、賈誼が言う「攻守」とは戰時における攻守ではなく、政治上の「取守」のことであり、それは互いに「術」（政治的方法）を同じくしないのである。大政下には「王者は政を易ふること有るも而も國を易ふること無く、吏を易ふること有るも而も民を易ふること無し」と言う。それなのに、秦は統一後も「詐力を先にする」（過秦下篇）戰國以來の政治的傳統を改めず、仁義を行うことがなかったから、亡びてしまったのだと言うのである。宋の眞德秀（一一七八～一二三五）は「賈生は秦の成敗を論じて千有餘言、而して之を斷ずるに『仁義施さずして、而して攻守の勢異なればなり』を以てす。文字は甚だ妙なり、但だ至當の論に非ず。蓋し儒者は以へらく、攻むるに譎詐を尚びて、而して守るに仁義を尚ぶとのみ」と言う（『史記評林』所引）。